〔塵塚談上〕享和三年癸亥四月より、江戸麻疹大に流行、貴賤多く是を患ふ、予が外孫内藤義一郎十三歳、吾家にて養ひけるが、五月十三日曉より頭痛發熱し、面部手足麻疹一面に出、少し重き麻疹と見えけり、其日近隣組屋敷、鐵砲稽古日に有けるに、見物に行き度よし望に付、よからぬ事とは思ひながら、病人の事、其意に任せ差遣しけり、自分にも玉數二十二丸放し、夕方歸る所、麻疹過半癒たり、家内の者大に驚き、土間といひ冷たるにより内攻と思ひ、我にも心痛せしが、氣分よく食事も常體、何事も平素に替らざれば、少しは安堵しけるが、即日に癒ける故、心を痛めしが、如何ともせんすべもなく、其日を過しけり、十四日朝、全く癒ていさゝか障もなし、鐵砲自分も放ち、玉音を多く聞ゆる故に、氣を替へたゞ一日にして癒けり、〇中略義一郎荆妻兩人は、思ひ設けずして早速に全快せし也、顯道此度の麻疹病、四月廿一日より、七月朔日迄、他の病人百廿三人、親族家僕十九人、養生所病人の内十六人、都て百五十八人、内に孕婦九人あり、百五十八人、死せし者一人もなし、義一郎がごとき、一日に癒し者も、只一人なし、

〔時還讀我書上〕癸亥〇享和三年ノ三月初旬、荻野台州ヨリ先君子へ書ヲ贈テイヘラク、朝鮮地方ニテ麻疹大ニ行レ、藥物ヲ對州ヘ乞來ルノヨシ、前月季傳聞セリ、此事虛誕ノヤウニモキコヘズ、往年ノ流行ノ時モ、朝鮮地方ヨリ對馬ニ至リ、長門ニ傳ヘ、夫ヨリ東西一般ニナリシト承リシト、癸亥ノ麻疫ハ、都下ハ四月中マデ病モノ猶少カリシガ、端午ノ日未牌ヨリ酉牌後ニ至ルマデ、白氣一道アリテ天ヲ亘リシガ、爾後俄ニ多ク行レ、沿門皆病ニイタル、丙申〇安永五年ノ疫ノ前ニモカカルコトアリシト聞リト、錦城先生ノ話ナリ、

〔時還讀我書上〕文政癸未〇五年霜月ノ頃ヨリ、西國ニ麻疹流行ノ風聞アリシニ、都下モ臘月ノ末ニハ、芝邊ニテ患ルモノアリ、甲申〇六年正月初旬ヨリ漸々流行シテ、二月ニ至テハ滿城皆コレヲ病ミ、三月マデニテ止ニケリ、大抵ハ輕症ニシテ、藥セズシテ愈ル者、亦少ナカラズ、